

令和元年 6 月 28 日

## ミャンマー話者が日本語を習得する際の困難点を、同国留学生が研究 ～日本・ミャンマーの交流強化に寄与～

### ◆発表のポイント

- ・岡山大学はミャンマーなど ASEAN からの日本留学を促進する日本留学海外拠点連携推進事業を展開しています。大学院社会文化科学研究科は、ヤンゴン外国語大学（日本語学科）から同大講師を博士後期課程に受け入れるなど、ミャンマーでの日本語研究をサポートしています。
- ・ヤンゴン外国語大学の講師で、4 月から社会文化科学研究科博士後期課程に入学したインモウテッさんは、日本語を学ぶ際のミャンマー話者の困難点などを明らかにする研究を進めています。
- ・インモウテッさんの研究は、両国の交流促進に寄与するとともに、日本語とミャンマー語の対照研究によって、言語の普遍性の探究に役立つことが期待されます。

岡山大学は、20 年来ミャンマーとの交流を深めており、平成 26 年 9 月には文部科学省留学コーディネート配置事業（ミャンマー）に採択され、さらに昨年度より日本留学海外拠点連携推進事業（ASEAN）へと活動が拡充されています。平成 27 年 2 月、ミャンマーのヤンゴンに岡山大学日本留学情報センター（OJEIC：Okayama University Japan Educational Information Center, Myanmar）を開設し、優秀な人材の日本への受け入れの窓口となるとともに、教育・研究における現地の大学と日本の大学との架け橋ともなっています。ミャンマーはアジア最後のフロンティアとして、大学のみならず日本企業からも注目が集まっており、ミャンマーにおける日本語教育と日本語研究者の育成は特に重要となってきています。両国のさらなる交流の進展に際しては、ミャンマー語と日本語の相違やコミュニケーション法の違いについての研究が不可欠です。

ヤンゴン外国語大学講師であるインモウテッさんは、言語教育の専門家として、このような研究を深めるために 4 月から本学大学院社会文化科学研究科博士後期課程に入学し、堤良一准教授の指導のもと、特に両言語の指示詞（こそあ）について研究しています。この研究は、日本語を学ぶ際のミャンマー話者の困難点などを明らかにするものであり、ミャンマーの方々の日本語理解、ひいては両国の活発な交流の促進に寄与するものです。また、日本語とミャンマー語というこれまであまりなかった二言語の対照研究をすることで、新たな言語学的発見につながることも期待されています。

### ■発表内容

#### <導入・背景>

ミャンマーは日本に住む私たちにとっては、どこにあるかすらおぼつかない国かもしれません。しかし、2010 年代以降に民主化政策が進んだ後はアジア最後のフロンティアとして、日本企業から

## PRESS RELEASE

の注目が集まってきています。ミャンマー人は性格的に日本人との親和性が高く、ベトナムに続く日本の生産拠点となる可能性もあります。また、中国の一带一路政策の中で、メコン地域に中国資本が多く流れ込んでいる中で、日本としては、ミャンマーとの関係は深めておきたい状況にあります。

岡山大学は20年以上続く医学系での交流実績や、国立六大学（千葉、新潟、金沢、岡山、熊本、長崎大学）との2件のJICA（国際協力機構）プロジェクト（工学・医学）という実績を背景に、平成26年9月に文部科学省留学コーディネーター配置事業（ミャンマー）に採択されました。その他、本学は、平成30年に始まったミャンマーメディカルエンジニア育成体制強化プロジェクト（国際協力機構（JICA））でも中心的な役割を担っています。

平成31年度（令和元年度）には、岡山大学は留学コーディネーター配置事業の後継である日本留学海外拠点連携事業（ASEAN）に採択されました。オールジャパン体制で留学生の受入れ促進に努め、令和5年には日本全体の大学への留学生を1.5倍とすることを目標に、ミャンマーを拠点としながら、タイ、ラオス、カンボジア、ベトナムなどASEAN全域へと活動を広げています。日本留学海外拠点連携推進事業では、留学生の日本定着（就職）への支援の必要性を踏まえ、日本語教育やミャンマー人材育成支援産学官連携ふらっとフォームとの連携に力を入れています。

社会文化科学研究科は、文学及び経済学においてミャンマーとの交流を推進しており、これまで日本語・日本文化研修留学生の受入をしてきた他、昨年度は2人が博士号を取得しました。平成29年度からは、ミャンマーのヤンゴンおよびマンダレーにおいて、堤准教授が中心となり、日本セミナーを開催してきました。その中で、ミャンマーの語学研究の中心であるヤンゴン外国語大学（日本語学科）との協力関係を構築できたことが、同大講師のインモウテッさんの社会文化科学研究科博士後期課程入学へとつながりました。同大からの博士後期課程への受入は今回が初めてですが、他にも今年度は同大卒業生が博士前期課程に入学し、経済学を学んでいます。

### <研究内容、業績>

インモウテッさんは、年々増加するミャンマー国内の日本語学習者のニーズに応えるべく、また、ミャンマー国内の日本語教育のさらなる発展の中心人物として活躍するために、自己の研鑽が不可欠であると考えて岡山大学への進学を決めました。

ミャンマー語は日本語と同じ、SOV言語（動詞などの述語が最後に来る言語）ですが、両者を比較対照して研究することで、今後増加するミャンマーからの人々が、日本語を学ぶ上でどのような困難が生じるか、またコミュニケーション上ではどのような支障が生じるかを予測することができます。一例を挙げると、ミャンマー語の指示詞はこれまでの研究では2つ、あるいは3つであるなどとされてきましたが、インモウテッさんの研究により、実は4つの指示詞が存在することが明らかになりつつあります。今後の実証を待たねばなりません。日本語のソノにあたる指示詞が、相手の周りの指すときと、少し離れた場所を指すときとで使い分けられています。日本語では両者は同じくソノで指します。この相違を理解しないとコミュニケーションに支障が生じます。また、日本語での記述や日本人に対して説明をするとき、指示詞の使用が適切でないため、相手を混乱させてしまったり、言いたい意味が正しく理解してもらえなかったりして困るという例もありま

す。

#### <展望>

インモウテッさんの研究内容は、ミャンマー語を母語とする人の日本語の習得に貢献するものであり、両国の交流のさらなる活性化に寄与するものと思われます。同時に、言語学的には、この2つの言語を比較する研究は、インモウテッさんのようなミャンマーからの研究者と協働することで飛躍的に進むもので、人間の言語のメカニズムに迫るものとして期待されています。

社会文化科学研究科としては、岡山大学のミャンマー事務所（OJEIC）と連携し、その活動に加わることで、さらに優秀な研究者のミャンマーからの受入の増加や、ミャンマーの学術研究の発展に貢献できることを目指しています。協力関係を構築しながら、将来的には特色ある共同研究へとつながることも期待しています。

また、ヤンゴン外国語大学の日本語研究者の育成をサポートすることは、同大の優秀な日本語学科学生が、卒業後の進路として岡山大学を選択することにもつながると考えています。加えて、近年、岡山の企業もミャンマーに進出したり、あるいは、ミャンマー人を岡山に受け入れたりすることが徐々に増えています。日本語を解するミャンマー人と岡山とのつながりが深まることで、岡山地域のグローバル化に貢献できると考えています。

#### <略歴>

1972年生まれ。大阪外国語大学大学院言語社会研究科修了。博士（言語文化学）。言語学・日本語学・日本語教育学を専門とする。岡山大学大学院社会文化科学研究科講師を経て2004年4月より現職。

#### <お問い合わせ>

大学院社会文化科学研究科

准教授 堤 良一

（電話番号・FAX）086-251-7459



岡山大学は、国連の「持続可能な開発目標（SDGs）」を支援しています。